

農耕の始まりと広がり

①農業と農耕のちがい
 農業 (agriculture) は牧畜を含むが農耕 (farming) は牧畜を含まない。農業は産業全体を指すのに対し農耕は耕作の行為を指す。人類学・考古学では農耕 (と牧畜) という言い方が用いられる。

狩猟・採集から農耕へ

農耕 (Farming) ①はいつごろから始まったのだろうか。10万～20万年前に現生人類が誕生して以来、ずっと狩猟と採集で生活をしてきたが、約1万年前に、西アジアで麦の栽培が、中国・長江流域または珠江流域でイネの栽培が始まったのが、農耕の始まりと考えられている。

農耕が始まったのは、人類が寒さをしのぎつつ大型哺乳類を追いかけて狩猟した氷河期 (最終氷期) が終わって、地球上の気候が温暖になり、定住して身の回りで食糧を確保する環境に変化したことにあると考えられている。

また、温暖期になって人口が増え、狩猟・採集生活が限度に近づいたときに、寒の戻り (ヤンガードリアス期) が起こり、森林の木の実が減少し食料不足になったことが引き金となって、農耕が始まったともいわれている。

4系統の多元的農耕起源論

中尾佐助著「栽培植物と農耕の起源」は、「農耕文化は、地中海から世界に広まった」というヨーロッパ中心の学説に異を唱えたもので、西アフリカ、中東、東南アジア、中南米の4系統が独立して発生したとする多元的農耕起源論である。

4系統の文化圏や栽培作物とその特徴は次のとおりである。

◆**根栽農耕文化** 東南アジアの熱帯雨林地帯が発祥。タロイモやヤムイモが共通の主食となり、サトウキビ、料理用バナナが

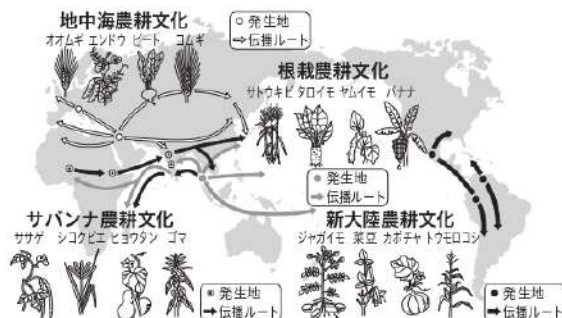


図1 世界のおもな農耕文化の発祥地と伝播経路 (中尾佐助, 1966年)

加わる。いずれも株分けや挿し木などの栄養繁殖で育てる作物で、焼畑農耕で栽培していた。農具は先端をとがらせた掘り棒だけであった。豆類、穀類などの栽培がなく、タンパク質の不足は漁労で補っていた。家畜としてイヌ、ブタ、ニワトリが飼われていたが、日常食には利用されていなかった。料理法は土器がなかったため、石焼き料理が中心であった。

◆**サバンナ農耕文化** 西アフリカからインドにかけての乾燥地帯に広がっていた。イネを含む雑穀 (アワ、ヒエなど) が主で、豆類 (ササゲ、アズキなど) もあり、油糧のゴマもある。ウリやナスなど果菜類も栽培された。いずれも夏作物で、芋類がない。米以外は粉食が多く、臼と杵を用いて土器で調理された。

◆**地中海農耕文化** オリентと呼ばれる西アジア (今の中東) が発祥。地中海気候で、冬も寒くなく降雨があり、夏は暑く乾燥。麦類が冬に生育する穀物として自生している。オオムギ、コムギのほか、ライムギ、エンバクなど麦作を中心に、エンドウ、ソラマメ、根菜類のビート、タマネギ、ダイコンなどがある。加工には粉挽きの臼、パン焼き炉。畜力による犂の利用で主食が大量生産されるようになる。麦類は乾燥貯蔵がしやすく、富の集積が成立、強大な階層社会と古代帝国を生んだ。

◆**新大陸農耕文化** インカ・アステカなどの大帝国があった「新大陸」中南米は、世界的に重要な作物の原産地である。穀物としてのトウモロコシ、豆類のインゲン、ラッカセイ、果菜類のカボチャ、トマト、トウガラシなどに加え、カリブ海沿岸にはサツマイモ、ポリビア・ペルーの高冷地にはジャガイモがある。

日本の農のルーツはどこか

図1の伝播経路から日本の農耕のルーツを見てみると、初めは中東からの「地中海農耕文化」、西アフリカからの「サバンナ農耕文化」、東南アジアからの「根栽農耕文化」の3つの農耕文化が伝わってきた。

中東から中国経由で流入した「地中海農耕文化」からは、麦類や、ダイコン、タマネギ、ニンジンなどの野菜類が伝播してきた。西アフリカからインド・中国経由で入ってきた「サバンナ農耕文化」からは、ゴマやコンニャクと同時にイネ (陸稲) も伝播してきた。

「根栽農耕文化」としては、タロイモの仲間のサトイモが栽培されている (図2参照)。

さらには新たにジャガイモやトウモロコシなどの「新大陸農耕文化」の産物も伝播してきている。



図2 サトイモの畑
 サトイモは、根栽農耕文化の伝播作物。昭和30年代までは、高知県や熊本県 (五家荘) などでは山間地での焼畑輪作により栽培されていた。
 (写真提供: PIXITA)